

日本労働年鑑 1951年版(第23集)

The Labour Year Book of Japan 1951

第二部 労働運動

第三編 農民運動

第二章 農業恐慌の深化と農業防衛闘争の展開

第六節 日農第三回大会の開催

一、分裂せる中央委員会 一九四七年二月第二回大会以来、内部抗争と対立激化のなかに二カ年以上にわたり大会開催をのばして来た日農も、迫り来る農業危機を打開せんとする下部組織と農民大衆の統一的農民闘争展開への熱望に押され、ついに一九四九年四月二一日東京明大講堂において中央委員会を、つづいて直ちに第三回大会を開催することに決定した。

まず中央委員会の開会に先だち、委員の資格問題で主体性派(野溝、稲村、岡田氏)統一派(黒田、大沢、山口、下坂氏)の争いが起り、もみ合いの結果ついに話はまとまらず、結局会場を別にして二つの中央委員会が開かれた。朝日新聞によれば「統一派は午後一時一五分開会を宣言して点呼を行い全中央委員二一四名のうち一四四名(委任状五)が出席したものと認め……議事を進め一方主体性同盟派も統一派の中央委員を非合法として午後四時から有資格中央委員二一七名中一一八名(委任状三九)の出席があったことを認めて中央委員会を開き……」と報ぜられたが、両派ともたがいに相手方の委員の資格は一部無効であり委員会は定数に達しないが故に非合法であると攻撃した。

かくて翌二二日より二つの日農第三回大会が、別々の会場において開催されることとなった。同じく朝日新聞(四月二三日附)によれば、黒田壽男氏を委員長とする統一派大会の代議員出席者は、定員五一一名中四五一名といい、野溝勝氏を指導者とする主体性派大会は二六四名の出席と報ぜられた。

二、統一派日農大会 統一派大会は二二日より三日間教育会館において開催され、議長に黒田委員長、副議長に山口、大沢、宮脇三常任をえらび、五九九名の有資格代議員の出席を確認し、民科、部落解放連盟、全農林、日映演その他団体のメッセージをうけ、徳田共産党書記長の統一戦線共同闘争について激励のあいさつがあり、一九四九年度運動方針の討議に入った。また前日中央委員会で常任を解かれた野溝、岡田、稲村、佐竹、田中氏らを「分裂首謀者」「脱落分子」として除名することを決議した。

第二、三日は運動方針の検討、当面する闘争の戦術その他について討議をつづけた。また大会には、産別、金属労組、民青、その他よりメッセージをうけ、農青連との共同闘争も決定された。第三日には、民擁同加盟や、国鉄大会への祝詞、日農議員団の結成等が可決された。

統一派大会の声明

先日来、日農は分裂するのではないかと、また大会の開催は困難ではないかと取沙汰されていた。日農を分裂に導き、全勤労農民の利益を吉田内閣と金融資本に売り渡さんとする分裂主義者の激しい妨害にもかかわらず、全国から参集せる熱心な代議員はよくその妨害を排除し、前日の中央委員会の決定に従って、きわめて健全に大会を成立せしめ、秩序ある議事を進行させている。日農本部から発せられた代議員招集状は五一一名であるが、本日

ここに参集した正式招集状を持参せる者は黒田委員長以下四〇七名である。そのほか日農本部内の分裂主義者によって招集状を寄せられなかったもので代議員資格あるもの五二名で、午後一時現在の数は四六〇名におよんでいる。かくして本大会は分裂主義者の破壊より規約上の権威を確保することが出来た。この形勢にあわてた分裂主義者は中央委員会の決定した正式の会場たる準会場(教育会館)から去って他の場所に会合し、本大会を誹謗している。

全農民諸君！かくて大会は予定の通り二四日までやり通す。あらゆるデマと宣伝にまどうところなく、農業と農民の利益を防衛する歴史的大会に参加せられたい。

なおわれわれは現在少数の脱落分子にまどわされている代議員諸君が、一日も早くわれわれの大会にかえってくることを待っている。

一九四九年四月二二日 日本農民組合第三回全国大会
統一派大会の宣言

思い起せば一九四七年二月、東京早稲田大学大隈講堂に開かれた第二回全国大会において、われらが輝かしい農民戦線の統一を闘い取って以来二年有余、われら全国農民の進む途は決して坦々たる途ではなかった。

独占資本と官僚の政府はようやくその本性を現わして人民に対する攻撃を強化し始めた。彼等は最初は世界民主勢力の圧力によって、渋々ながら農地改革を実施し農業会を解体したが、決して真に農村民主化と農民解放をやろうとしたのではない。常に機会あらば、再び地主制度を復活し、農民を零細な土地に縛りつけ、昔のような奴隷状態に追い込もうと陰謀をたくましくしていたのだ。

強権による供出制度の強化、食糧法による戦時作付統制の復活、農家収入の四三%におよぶ重税等々われらが身をもって知る農民搾取の足かせ、手かせは次々とかけられた。かくして最も兇悪な独占資本の代弁者吉田民自党内閣は最近に至り、昨年度の倍に近い税金、すなわち農家所得の約八〇%に及ぶ重税を収奪する予算を強硬的に成立せしめ、治山治水、農業復興の予算を大削減し、さらに農地改革を逆行せしめる法規の改悪を計画し、農民生活と農業を急速に破滅せしめつつある。さらに都市の労働階級からは賃金の七割を税金でしぼり取り、罷業権、団結権を奪い取り、数百万の失業者を街頭に投げ出そうとしている。(中略)

過去二年間、われわれ農民はかかる反動勢力と戦う途は日農を中心とする農民戦線の統一と労働階級との同盟によるほかはないことを確信し、そのために実に苦心惨憺の努力を払って来た。しかるにわれわれの願望する統一が実現せず、敵階級の願う戦線分裂がたえず行われてきたのは何故であるか。それはいうまでもなく日農本部に巣喰っていた一部少数の幹部およびこれにつながる地方ボスが自己の利益と地位のために農民の利益を政府に売り渡し、反共の名の下に正規の機関を無視して、あらゆる専断と横暴を行ってきたからである。

かれらは過去二年間農民のためには何一つのなすことをせず、ただひたすら日農の分裂と解体とのため狂奔したばかりでなく、農民大衆の正しい批判と日農の革命的発展を恐れて年次大会を理由なく引きのばし、いよいよ逃れられなくなった今日、みにくい策謀をもって権威ある中央委員会と大会を流会させようとした。これこそ今日までの一切の混乱と戦線破壊の責任が、日農を自己の私有物のごとく考え、反動政権の手先として働いた一部旧幹部の裏切行為にあることをはっきりと暴露したものである。(中略)

日農二〇〇万戸の組合員諸君！

全国五〇〇万戸の農民諸君！

味方の陣営を清めたわれらは今こそ大きく前進しなければならぬ。即ち革命的伝統に輝く日農を中心とする全農民戦線統一を村村につみあげ、日農、全農、農青連等を無条件に合同せしめ、一切の農民団体と心から提携し全農民の全国的結集をはかることそしてすべての勤労階級と共に民主民族戦線を形成すること、これこそ吉田暴力政府を打破り、農業革命を達成し、人民の解放を戦い取る唯一の途である。

広く世界の状勢を見よ。

革命の嵐の中に立つ中国を初め、七億の人民を含む広大な地域には人民民主主義者の旗がひるがえり世界の民衆の援助はわれわれにそそがれている。

暗い夜はすぎ去り、暁は近い。われわれ全人民が団結して戦う時に働く人民の国家は樹立され、農民が心から収穫を喜び、文化生活を楽しむ社会は建設されるであろう。

新しい希望をもって立ち上ろう！

農民の解放と農業の復興へ！

農民戦線の大統一、全國民代表者会議の結成へ！

勤労階級と手を握り民主戦線の確立へ！

吉田暴力内閣を打倒して民主人民政府の樹立へ！

勝利を確信して堂々前進しよう！

右宣言する

一九四九年四月二四日

日本農民組合第三回全国大会

三、主体性派日農大会 主体性派大会は専修大学講堂において三日間にわたりひらかれ、前日の中央委員会において決定した黒田氏以下六四名の統一派中央委員の除名を確認し、日農より共産勢力を排除する旨の声明を発表した。本部報告、運動方針審議に第一日を終え第二日は「九原則に対する日農の基本的態度に関する件」等数議案を討議し、新中央委員と本部役員を選出、第三日目は中央委員会をひらき新執行部の選出を行った。

主体性派大会の声明

光輝ある日本農民組合第三回全国大会開催に先立つ中央委員会に於て日本共産党は暴力を以て会場を占拠し、正当なる中央委員会の外に偽中央委員会を開催した。その結果、本日また二つの大会が持たれるに至ったが、我らの大会こそ眞に農民の代表にして正当なる資格を有する代議員によって構成せられる大会である。我らは暴力的衝突が全国農民に対して深甚なる影響を及ぼすことを慮かり衝突をさけてここに(専修大学)彼らを排除して本大会を開催したのである。

我らは日本資本主義再編成の強行過程において農民生活の危機をまさに至らんとするとき、本大会に於て当面する重要問題とその具体的対策を眞剣に討議し、更に本大会を契機として暴力革命のために混乱と無秩序を推進企図する共産党分子を排除し、組織の再建と拡大強化に邁進することをここに声明する。(後略)

主体性派大会の宣言

日本経済再建の基本方向は、経済九原則によって示されている。吾々は日本の自主的再建の一日も早からんことを念願する立場に於て、農民のしのぶべき犠牲と負担を、敢えてさげんとするものではない。

しかるに、いまや保守反動政府は、農民の一方的負担に於て旧地主と資本主義勢力の復興をはからんとしているが、かかる方針が九原則の実施に名をかり、これを農民重圧の道具につかわれることに対して断乎反対する。(中略)

しかるに第二回大会以来、日本共産党の日農支配の野望はその後数次にわたる中央委員会、農民代表者会議等を農業問題を忘れて政治的論議をもって混乱せしめ、更には又地方組織を攪乱し、かくて日常活動の活発化は阻害された。

吾々は組織の統一のため隠忍自重あらゆる努力を払ったが、本大会前日の中央委員会は共産党員の暴力的会場占拠により、その極点に達し、遂に最後の処断のやむなきに至った。

かくてわれわれ農民の組織を攪乱分散せしめたところの日本共産党の非農民的破壊勢力を断乎排除した。

農民勢力の分散は、集結と統一を求める吾々の甚だ遺憾とするところである。しかしながら農民戦線の統一は単なる形式的機械的統一であってはならない。吾々の求めるものは内容的、実質的な統一でなければならない。この組織の整備こそは日本農民運動の中核となるものでなければならない。

われ等は誤れる日本共産党の指導によりまどわされ正しき日農の戦列より離れんとする全国の一部農民同志に対し、速やかに本組合に戻られんことを、切望してやまない。

われわれは茲に新たなる決意をもって反動勢力の撃碎のために固く固く団結し、新運動の展開に向ってその新たなる発足をなさんとするものである。

右宣言する。

一九四九年四月二三日

日本農民組合第三回全国大会

日本労働年鑑 第23集／1951年版

発行 1951年1月1日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年2月15日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1951年版(第23集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
